

厳しい冬の情景が脳裏に浮かぶ

津軽海峡・冬景色



津軽海峡・冬景色

作詞 阿久悠
作曲 三木たかし
唄 石川さゆり

上野発の夜行列車 おりた時から
青森駅は 雪の中
北へ帰る人の群れは 誰も無口で
海鳴りだけを きいている
私もひとり 連絡船に乗り
こころそつな 鴨見つめ
泣いていました
ああ 津軽海峡冬景色

ごらんあれが竜飛岬 北のはずれと
見知らぬ人が 指をさす
息づくも窓のガラス ふいてみたけど
はるかにかすみ 見えるだけ
さよならあなた 私は帰ります
風の音が胸をゆする
泣けとばかりに
ああ 津軽海峡冬景色



写真 津軽海峡をゆく青函連絡船(撮影 荒川好夫)

津軽海峡の名を世に知らしめた名曲

“北へ帰る人の群れは 誰も無口で 海鳴りだけをきいている”。昭和52年にリリースされた石川さゆりが歌う「津軽海峡・冬景色」は、作詞・阿久悠、作曲・三木たかしという日本歌謡界を代表するコンビによって作られた昭和の名曲である。恋に破れて東京を去り、北海道へと帰郷する女の辛い心情を夜行列車と真冬の津軽海峡、青函連絡船で渡る人々の情景描写と共に哀調を込めて切々と歌っている。多作で知られる阿久悠作品の中でも、この曲の歌詞は代表的な傑作である。

当時19歳だった石川さゆりはこの曲で第19回日本レコード大賞歌唱賞や第6回FNS歌謡祭最優秀グランプリを受賞し、NHK紅白歌合戦の初出場も果たしている。彼女にとっても一気にスターダムにのし上がった印象深い曲であると共に、一生歌える曲ともなった。

ふるさとへ回帰する人々の“心”を運んだ、青函連絡船

津軽海峡は北海道と本州を隔て、日本海と太平洋を結ぶ海峡である。東西約130km、最大深度は約450mで最も幅の狭い地点で約19kmある。かつては、青函連絡船が青森と函館を結んだ。歌詞から見ると青函連絡船が運んだのは、例えば夢破れ故郷・北海道へ帰る傷心の人々、津軽の海に最後の未練を捨てふるさとへ回帰する人々、そんなイメージである。そのような人々も多く乗船したであろう青函連絡船は、曲がリリースされた昭和52年頃には、客船と貨物船で計13隻、1日最大で30往復もの輸送を可能にしていた。そして、昭和63年の廃止までに青函連絡船として活躍した船は、累計50隻以上にのぼった。

近年では大間のクロマグロなどで知られる津軽海峡だが、その名を広く知らしめたのは、この歌だった。

本州と北海道を結んだ夜行列車と連絡船

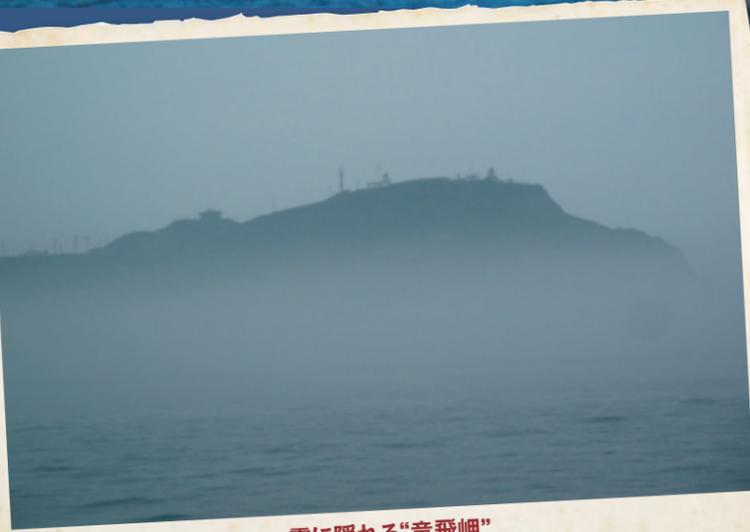
この曲の発売された昭和52年当時、「八甲田」「十和田」「ゆうずる」など、“夜行列車”が何本もあったが、その中でも「八甲田」がモデルだろうと推測する人が多い。その理由は、大勢の人が無口に列車から連絡船に乗り換える光景は、青森に早朝に着く「八甲田」が似つかわしいというのだ。

列車から乗り継ぐ青函連絡船は明治41年から昭和63年まで、約80年間本州と北海道を結ぶ主要航路であり、鉄道車両をそのまま積み込む鉄道連絡船だった。悪天候による座礁、転覆事故も多かったが、戦後の昭和29年に起きた台風15号による沈没事故では、洞爺丸を含め5隻の連絡船が座礁、沈没、1430人の犠牲者を出した。この事故が青函トンネル着工の、直接の引き金になった。

津軽海峡を往復した連絡船のうちの一部は、廃止から30年余り過ぎたいま、青森港と函館港にそれぞれ係留され、当時の面影を残している。



青函連絡船の見送りシーン 旅立つ家族や友人を紙テープと共に見送るシーンがみられた。提供 朝日新聞社



霧に隠れる“竜飛岬”

本来の青函航路から“竜飛岬”をみることはできなかったが、この曲のヒット後は船長の計らいで、“竜飛岬”が望める航路をとったこともあったという。撮影 小暮道靖